授業名：研究計画

大学院のゼミの談話における言いさし文について外国人と日本語母語話者の相違ー「ケド」、「ガ」を中心に

学籍番号　S14（あだ名）

一、はじめに

この論文の目的は、大学院のゼミの談話における言いさし文について、外国人と日本語母語話者の相違によって明らかにすることである。日本の大学院ゼミでは普通の会話環境と異なって、より厳密な言語の使用を参加者に要求され、日本語能力試験一級を合格した人がゼミで発話できない状況がよくある。また、大学院のゼミでは「自分の意見を話さなければいけない」という特性があるため、留学生が論点を論じる際に母語話者との相違が普通の会話と異ることが予想されている。日常会話で見れない留学生の日本語の問題を明らかにするため、上級日本語学習者として外国人大学院生がゼミでの発話や言語の使い方を分析する結果が留学生教育にとって役に立つと考えられる。特に言いさし文について、本研究は大学院ゼミで留学生と母語話者にとって言いさし文がどう機能するのかを示したい。日本語学習者には、日本語母語話者と円滑なコミュニケーションを行うため、語用論的運用能力が必要だと前の研究者が示した（朴，2000）。朴によれば、日本語学習者にとっ言いさし表現は正しい使用することができずと言われている。ゼミで留学生の語用論的運用能力を高めるため、本研究はゼミで留学生と日本人学生の言いさし表現を考察することにする。

二、先行研究と本研究の位置づけ

大学院のゼミの談話における言いさし文について扱った研究には、「言いさし文」の談話機能（白川、2008）や現代日本語における接続助詞で終わる言いさし表現について（朴、2000)などがある。

白川によれば、言いさし文は主節を伴わずに従属節のみで表現されるものであり、「関係づけ」と「言い尽くし」と「言い残し」3種類の類型が認められる。白川は、関係づけの言いさし文は「ノニ節」と「カラ節」と「シ節」と「テ節」四つの種類があり、節の内容を文脈上の他の事柄と関係づけることによって、話し手の何らかの対事的な態度を表す談話機能をもっている一方、言い尽くしの言いさし文は「ケド節」と「から節」二つ種類があり、対人的態度を表す談話機能をもっていると述べている。この研究を通じて、狭義の「言いさし文」である「言い残し」を除くほか、広義の「言いさし文」である「関係づけ」と「言い尽くし」の言いさし文が完全文同等の内容と完成性を備えた発話として機能していると筆者が論じた。

朴は日常会話で使用頻度が高いと思われる「から節」と「けど節」による言いさし文を注目し、テレビドラマ及び映画の会話文を分析し、言いさし文がどのような機能するのかを

論じた。朴が言いさし表現を発話意図が言語化されている「終助詞としての機能」と発話意図が言語化されていない「接続助詞としての機能」に分け、語用論的運用能力を分析できる「接続助詞としての機能」を持つ表現を分析対象とする。朴によると、「けど節」は(1)「誘い」や「申し出」等の働きかけをする (2) 「断言」を和らげる (3)自分の意見をぼかすための三つの用法がある。また、朴は日本語母語話者が言いさし文を使う際に彼らの語用論的能力を分析し、話し手は自分の発話意図を言語化せずに聞き手にその意図を察してもらおうとし、一方聞き手にはその意図を読み取る察しの能力が備えられていることを指摘した。朴によると、母語話者は察しの能力が備えられているため、効果的コミュニケーションを行っていることができるそうだ。

陳(2013)は台湾人中上級日本語学習者と日本語母語話者における「が節」、「けど節」と「から節」による言いさし文の使用状況を比較し、母語話者と日本語学習者にとって言いさし文の談話機能がどうのような異なっているのかを指摘した。また、筆者は日本語学習者が「言いきり」の使用率が高いが、使用の理由が説明できないため、彼らが言いさし文の談話機能を理解していないと主張し、台湾の教科書や授業では文末省略について説明がすくないのが原因だと述べている。

しかし、白川と朴は漫画やテレビドラマを会話データとして用い、日常会話においてよく使われる言いさし文や談話文脈を分析したが、実際のコミュニケーションにおける言いさし表現は観察されなかった。一方、陳は選択問題のアンケートを用い、人がどの選択を選ぶのかを観察したが、実際に会話する際には同じ表現を使えるかどうかについて一つ問題点がある。また、陳の観察対象である中上級日本語学習者の日本語能力に(JLPT N3からN1までのレベル)に大きいな差があるが、陳は研究対象を日本語能力のレベルによって分類しなかったので、研究結果が留学生にとってふさわしくないと考えられる。加えて、日常会話と大学院のゼミで使う言葉や話し方が異なっていることを含め、大学院のゼミの談話を対象に、上級日本語学習者といて留学生と日本語母語話者が使った言いさし文の相違という観点から扱った研究はない。そこで、留学生がゼミで母語話者のように正しい言いさし文を使えることが目標として、日本語教育に役に立てるために、私は留学生と日本語母語話者が大学院のゼミで使った言いさし文の相違について分析を行うことにしたい。

三、研究の資料と分析の方法

研究の資料は、2015 年 9 月に、神奈川県の三浦半島のホテルで行われた都内の大学院の某ゼミナールの 40 分程度の談話二つを文字化したものである。

そして、その文字化データから言いさし文の観点からデータを抽出し、留学生と日本語母語者が使った言いさし文の機能の違いによって分析を行った。予備調査の結果から、研究の資料で見つかられる言いさし表現は「けど」、「が」しかいないことが分かる。従って、本研究は「けど」と「が」の言いさし表現を中心として、陳(2013)の研究による言いさし表現「が」、「けど」の談話機能の分類(表 1)に基づき、文字化データで日本語母語者と留学生の言いさし表現を分けて分析する。ところが、白川(2008)による言いさし文の分類で「 ガ」が含まれていないことがあるが、陳が「ガ」を言いさし文として取り上げたうえに、齊藤(2007)も「ガ」には、「ケド」にはない「終助詞的用法」があるが、言いさし表現

について基本的に「ケド」と同じ意味と機能をもっていることを指摘した。従って、本文ではガ．ケドを同じ種類の言いさし表現として扱い、分析する。

[表1] 言いさし表現としてケド．ガの談話機能

1.話題導入
2.話し手へのへりくだり
3.相手への「依頼」、「誘い」、「申し出」
4.自分の主張、判断、意見の和らげ
5.話者交代の促し
6.不確かな情報確認
7.情報の補正、または補足

四、分析の結果

予備調査では一つの文字化資料での言いさし表現の使用状況を分析した。まず、研究の制限として、ゼミのメンバー構成は外国人の4人と日本語母語話者の1人であるため、日本語母語話者について扱える資料が外国人より少ないことがある。また、ゼミでの会話が日常生活の会話と異なって、「会話」より「問答」に近づく、長い発言もよくあり、完全文ではない言いさし文が数少ないのが分かる。次に、資料によるゼミで使った言いさし表現は「ガ」と「 ケド」しかないことは、ゼミの談話性質に原因があると考えられる。

参考文献

白川博之（2008）「『言いさし文』の談話機能」串田秀也．定延利之．伝康晴『「単位」といての文と発話』ひつじ書房 pp.1-25

朴仙花(2008)「現代日本語における接続助詞で終わる言いさし表現について-「けど」「から」 を中心に-」『言葉と文化』(9) pp.253-270

陳宜萱(2013)「台湾人中上級日本語学習者における文末省略使用状況―日本語母語話者と比較して―」銘傳大學修士論文

齊藤美穂（2007）「名詞句に接続するガ・ケドの用法」『阪大日本語研究』(19)pp.17-48